

世界の農業機械・資材トレンド

ヨーロッパの農機実用テストの権威、ドイツ「profi」誌に掲載された世界の農機の最新情報

Can-Am revved at side-by-side prospects オーストラリア

4輪バギー、新興市場で全開



オーストラリアの農場に4輪バギーを売り込もうと、意気込んでいる企業がある。カナダで4輪バギーを製造販売するBRP社だ。同社の会長兼CEOであるホセ・ボイスジョリ氏は、タスマン海の両岸にあるオーストラリアとニュージーランドの双方を、将来の有望市場と考えて市場開拓キャンペーンを企画しており、南半球での販売拡大の可能性を広く目論見だ。

BRP社といえば、一番の人気車種は4輪バギーの国際大会「カナディアン・アメリカン・チャレンジ・カップ」から名前をとった「カンナム」モデルだ。これは日本でも発売されている。ただし、同社のボイスジョリ会長がオーストラリアとニュージーランドに売り込もうとしているのは、左の写真の「コマンダー」モデルだ。

カナダ・ケベック州を拠点とする同社の傘下には、7つのメーカーが名をたらねており、そのうち2社はスノーモビルの生産に特化して急成長を遂げている。「コマンダー」シリーズはメキシコの工場で組まれている。

こうした同社のグローバル経営の展開は、着実に世界で実を結び始めている。同社が製品を販売している市場のうち、売上実績の最上位は本拠地である北米、その次は北欧、3番目はロシアと東欧、そして4番目がオーストラリアとニュージーランドになりつつある。同社が輸出に力を入れているのは、北米市場の4輪バギー部門が低迷して、かつては年間100万台あった販売実績が、今では50万台以下になっているからだ。本拠地の北米市場から重心を移して、4輪バギーの新しい販路をオーストラリアやニュージーランドなど、新興市場に求めるのは当然の選択だろう。



BRP社の会長兼CEOであるホセ・ボイスジョリ氏。同社はオーストラリアとニュージーランドで4輪バギーの市場開拓を企画している。

Give the soil some air 米国

土壌にもっと空気を



米国インディアナ州を拠点とするジェネシス・ティレージ社が製造販売しているGen-Till IIエアレータは、表層を混和しながら土壌間隙を増やす作業機だ。その重厚な機体は3段階に折りたたまれていて、機体の基幹部分には幅4.5m、そこから2.3mと1.5mの延長部分が伸びる構造になっている。過酷な作業に耐えるようにタイヤとホイール、連結部分やスピンドルにも十分な強度が備わっている。新しい機種には、これまでの機種になかったリアのヒッチもついており、さらに別の作業機を牽引することも可能だ。

最近、この作業機をテストしたイリノイ州在住のリー・オミストン氏は「起伏の多い牧草地に1エーカー当たり2万ガロンの液体肥料を散布した。通常はかなりの液体肥料が斜面を流れて行くものだが、これで作業した圃場では、みるみる土壌に浸透する」と驚く。

このGen-Till IIエアレータで作業すると土壌中に酸素が送り込まれて好気性菌の働きが活発になり、作物残渣の分解が促進する。また、農業機械で踏圧を受けた表層を粉碎して水分の浸透率を上げ、より長い期間にわたって土中の水分が保持できる。

ミシガン州で施肥のコントラクターを営むフランシス・クルメナカ氏は「私は作業幅16フィート(約4.9m)のモデルで液体肥料を散布している。この作業機の導入で、肥料を土中に混和する作業が必要なくなった。以前は散布した後、何時間も圃場の表面に液体肥料が残っていたものだ。今では圃場の端でUターンして戻ってくるまでに、浸透して見えなくなっている。顧客は、私が1万ガロンの液体肥料を散布したその日に播種していた」と話してくれた。



ジェネシス・ティレージ社製、Gen-Till IIエアレータ。ツメ部分は熟処理加工されている。



Joskin goes self-propelled

オランダ

カーゴ・トラックはオランダ・ヴェルデフィゼン社のホバートラックをベースに設計されている。キャabinはニューホランド社製FR型飼料運搬機と共通仕様だ。



8輪駆動、6輪操舵のホバートラックについて説明するジョスキンの輸出部長、フランシス・ヴィルツ氏



ベルギーのリエージュ州を拠点とする機械メーカーのジョスキン社が、自走式の運搬車を発売した。カーゴ・トラックと呼ばれるこの運搬車には車軸が4つある。オランダのヴェルデフィゼン社の工具運搬機「ホバートラック」をベースに設計したものだ。8輪駆動で6輪操舵、330kW/450hpのエンジン、16段トランスミッション、独立懸架サスペンションなど、スペックには大幅な変更が行われており、最高時速は80kmだ。

同製品は既に、オランダ国内で開催された展示会で何度もコントラクターに披露されている。同社はカーゴ・システムとの連携能力の高さを強調しており、同一規格の枠組みでダンブカー、サイレージ運搬車、そしてスラリー・タンカーとしても使える。サイレージ運搬車として使用する場合の積載量は45m³。同社製の有機質肥料の散布機と連結して使うこともできる。

このカーゴ・トラックが最初に公開されたのは、ポerland北西部のチュチャンカ市での営業開始10周年記念の式典会場だった。



Young farmer helps back sufferers

南アフリカ

ミクリス氏の説明によれば、この機械の恩恵を受けるのは小規模農家だけではない。トラクターで牽引する播種機を使っている大規模経営者達からも、補植の手間を簡単にするツールとして好評を得ているらしい。



自身が考案した手動の播種機について説明するミクリス・ヤンス・ヴァン・レンズバーグ氏

この播種機の間隔だと1ha当たり2万〜2万5000株の栽植密度になり、不耕起で播種した場合でも発芽状態と収量は満足できるものだった。馬を2〜3頭使って耕起しながら作業した場合、やはり1日当たり0.4haだと考えれば、作業効率は引けを取らない。雄牛を使って播種している場合は、もっと効率が悪い。

ミクリス氏の説明によれば、この機械の恩恵を受けるのは小規模農家だけではない。トラクターで牽引する播種機を使っている大規模経営者達からも、補植の手間を簡単にするツールとして好評を得ているらしい。

腰痛の特効薬



南アフリカで開催されるナンボ・ハーベストデイ・エキスポの発明コンテストは、すぐに商品化できそうなアイデアが満載だ。2010年度のコンテストも、期待を裏切らないものだった。

ミクリス・ヤンス・ヴァン・レンズバーグ氏は、手動の播種機を発表して青年部門で優勝した。手動の播種機は、既に多くの種類のものが市場に出回っている。ミクリス氏が考案したものは、構造がとても単純でありながら作業性にも優れており、輸入品よりもはるかに低コストで製造できる見込みだ。

この播種機の特徴は、正確に一粒の種子を選び出して、最適な深さと位置に置くことにある。メイズの小規模農家たちがこれを手に入れば「腰痛の特効薬」となること間違いなし、ミクリス氏に感謝するに違いない。

実際、会場で発表してすぐに、彼はフリーステート州バルトフオンテーン市の農場に生産工場を建てて注文に応じている。アフリカの畑作地帯で一般的な幅1.5mの畝に200〜250mm間隔で試験的に播種作業をしたところ、1人で1日に最高0.4haのメイズを播種できるという結果が出た。